

北海道教育委員会会議審議概要（令和6年第2回）

1 公開案件の審議

(1) 報告1 北海道地学協働アワード2023について

ア 説明員 伊藤社会教育課長

イ 結論 報告を了承

ウ 審議内容

【伊藤社会教育課長】

資料2 ページの別添1「開催要項」を御覧ください。本事業は、地学協働に取り組んでいる学校のうち、地域と連携・協働体制を構築し、地域課題の解決のために生徒が多様な学習活動に取り組んでいる学校に対して、その功績をたたえるとともに、全道における地学協働のより一層の推進と活性化を図ることを目的に行うものであり、今年度で2回目の開催となります。

対象は、公立高校、中等教育学校後期課程、特別支援学校高等部とし、これまでに応募のあった15校について予備審査を行い、本審査出場校6校を選出します。

予備審査は、北海道地学協働アドバイザー、北海道地学協働活動推進会議構成員等の14名を審査員とし、「地域と学校の協働体制の構築」、「協働体制構築による多様な活動」、「協働体制構築の成果」等の観点から審査を行います。

予備審査を通過した6校は、2月16日に実施する本審査において、学校教職員やコーディネーター、生徒によるオンラインでの発表を行い、その審査後、グランプリ1校、準グランプリ1校、特別賞4校を決定し、表彰します。

当日の様子は、YouTubeチャンネルでライブ配信し、道内で地学協働活動に取り組むコーディネーターや学校関係者をはじめ、一般の方の視聴も可能とするなど、広く道民の皆様にも取組の情報を発信していきます。また、応募のあった全ての学校に対し、今後の地学協働活動に生かすことができるよう、全審査員からのフィードバックコメントを

送付するなど、更なる地学協働の充実に向け取り組んでいきます。

3ページの別添2については、昨年度実施した様子について掲載していますので、御覧ください。

説明は以上です。

【倉本教育長】

御質問や御意見はありませんか。

【青山委員】

このアワードについて、通算何回目の開催かということと、今回15校のエントリーがあるということでしたが、昨年度はエントリー校が何校あったのかを教えてください。

【伊藤社会教育課長】

このアワードの開催は、今年度で2回目となります。昨年度の1回目には、25校のエントリーがあったところです。

【青山委員】

昨年度は25校ということで、今回はエントリー校が少ないようですので、もう少し集められなかったのだろうかと思いました。

【伊藤社会教育課長】

昨年度は初めての開催だったこともあり、教育局による掘り起こしなどを行ったために、エントリー校が多くなっていたところでしたが、今回は自然体に任せて応募者を募ったところです。

【青山委員】

15校ある中から6校を選んで、特別賞以上はもう決まっているので、このままだと3分の1以上の学校が受賞になってしまいます。やはり目指すは30校以上のエントリーではないかと感じましたので、掘り起こしについても力を入れていただきたいと思います。

【川端委員】

最初の予備審査はどのように行っているのか、また、応募の際に生徒たちが提出する発表資料の基準があれば教えていただきたいと思います。

【伊藤社会教育課長】

エントリーの段階で、エントリーシートとパワーポイント資料、参考資料を、枚数を指定して学校経由で提出してもらっているところです。まず、地域と学校の連携協働体制の構築についてなどの5観点からなる指標を用いて、審査員が書類審査を行います。その後、個別の評価を集計して予備審査を行い、予備審査を通過した6校が、2月16日の本審査会である地学協働アワードの日に発表を行って、グランプリ、準グランプリ及び特別賞を決定することとしています。

【川端委員】

ある程度、資料の枚数と、必要事項を盛り込んで分かりやすく書くよう指定をして、まずは集約して予備審査を行い、基準を満たしているかという観点から点数をつけていって、選ばれた学校がYouTubeライブでの発表の際に、実際にその資料を画面に投影しながら、参加する生徒の言葉で発表するということによろしいですか。

【伊藤社会教育課長】

はい、そのとおりです。

【大鐘委員】

地学協働というのが、全国的に今、特に求められている学校教育の一つの在り方ではないかと思います。特に、北海道において進めていくべき活動だと思いますので、こういうアワードを作って表彰していくというのは、一つの良いやり方ではないかと思います。

一方で、今度、2月の初めに探究チャレンジというコンテストもあり、この地学協働と並んで高等学校では総合的な探究の時間という授業があり、その探究という学習の在り方について表彰していくコンテストが行われているということですが、どちらも大事な二つの視点ではないかと思います。それぞれの内容の差異化、違いを明確にしておくことが大事だと思いますが、多分に重なる部分もあるかと思います。この二つのコンテストについて、どのような違いを作り出して、それぞれを推進しようとされているのかという点について、説明いただきたいと思います。

【伊藤社会教育課長】

昨年度、1回目のアワードを実施した際に、大鐘委員から御指摘があったように、学校からも「違いが分かりにくい」という声がありました。その反省を生かし、S-T E A M教育推進事業「「探究」チャレンジプロジェクト」は、高校生が取り組んだ探究活動の成果を発表・交流するなど、生徒の「取組」を表彰するものですが、それに対し、当課で実施する「地学協働アワード」につきましては、地域課題解決のための高校生と地域住民との多様な活動や成果など、それを支える優れた地域と学校との連携協働の「体制の構築」について表彰するものとして、差別化しているところです。

【大鐘委員】

ありがとうございます。もう1点要望ですが、この地学協働については、学校と地域との連携協働ということで、一つの視点として、コミュニティ・スクールの在り方にも関わってくる部分が大いだと思います。特別支援学校のエントリーもあることを考えると、都市部においても、そういった地域との連携協働というものを創造していくことができるのではないか、都市部における地域との連携協働もこれから作っていくべきではないかと考えますので、このアワードをそういう形で広げていただきたいと思います。

【渡辺委員】

本審査で発表される方々は、Y o u T u b e ライブで発表されることになると思いますが、予備審査はどのような形で行われたのかを教えてくださいいただけますか。

【伊藤社会教育課長】

予備審査は、元校長や市町村教育委員会にコーディネーターとして在籍している方など、道教委で委嘱している北海道地学協働アドバイザーと、その他市町村の職員や教員、民間団体の方など、8名の方々をお願いして行っているところです。

【渡辺委員】

書類審査ですか。

【伊藤社会教育課長】

書類審査です。

【清水委員】

審査の観点というところですが、地域と学校との協働体制を構築されて、それに基づいて多様な活動がなされ、生徒の発表と、生徒が主体的に活動していったその成果が出ると思うのですけれども、協働体制の構築の段階にも生徒というのは深く関わってくるものなのではないでしょうか。つまり、どちらかというところ、地学協働アドバイザーなどがいて、校長先生や学校側が地域といろいろな協議を重ねて、その活動が具体化していく中で生徒たちが関わってくるという印象を持っていたものですから、地域と学校との協働体制の構築の段階から、生徒が積極的に関わっていくという理解でよろしいのでしょうか。

【伊藤社会教育課長】

そのとおりです。生徒も交わって一緒になり、地域と結び付くような形の体制を作っていく、ただ単に組織と組織だけではなく、生徒を交えた形で体制を作っていくということを主眼にしています。

【倉本教育長】

ほかに御質問や御意見はありませんか。

《委員から質問・意見なし》

【倉本教育長】

それでは、以上で本件の審議を終わり、報告を了承します。

(2) 報告 2 令和5年度文部科学大臣表彰（優秀教職員）の被表彰者等の決定
について

- 報告を了承